

## ヨハネによる福音書13章1-20節 「足を洗うイエス」

### 1A 極みまで愛された方 1

### 2A 足洗いを受ける弟子たち 2-11

1B 万物が委ねられておられる方 2-5

2B 足洗いにある清め 6-11

### 3A 主の命令 12-20

1B 互いに仕え合う 12-17

2B 裏切りの予告 18-20

## 本文

ヨハネによる福音書 13 章に入ります。今朝は、13 章の前半 1 節から 20 節まで見ていきます。前回、お話ししましたが、ヨハネ 1 章から 12 章までは、世に対してご自身を信じなさいという、外に対する働きかけが書かれていました。13 章から 17 章までは、すでにご自分のものとされた、ご自身を信じ、受け入れている者たちに対する愛の言葉が書かれています。これまでは、世においてイエス様が光であるということが多く書かれていましたが、今は内にいる弟子たちに対して、愛を尽くして、語りかけてくださっています。

ところで、一昨日、朝のズームでのデポーションで、雅歌 1 章 3 節から分かち合いました。「あなたの名は、注がれた香油のよう。」雅歌に触れることは珍しいので、雅歌はいったい何が書かれているのか？という話で盛り上がりました。簡単にいうと、男女の愛です。いや、夫婦愛です。結婚に至るまでの二人と、結婚した後の愛の営みについて書いてあります。けれども、神がイスラエルに対してご自身を語られる時、またキリストが教会に対して語られる時、それが夫と妻の関係で語られていることをお話ししました。ある方が、「この名を、イエス様に当てはめると、そのまますっきりしますね。」とコメントしてくださいました。そうなんです、イエス様がご自分の者になった弟子たちに対して、愛の限りを言い表しているのが、13 章以降の主の言葉です。イエス様の名が、注がれた香油のようになりますように。

### 1A 極みまで愛された方 1

1 さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。

私たちは、前回、イエス様がすでに過越の祭りの週の初め、日曜日にエルサレムに入られたところを読みました。そして過越の祭りがあります。夕暮れ前に子羊を屠り、血を流し、日が暮れたら、

種なしパンと苦菜を食べ、また屠った子羊を焼いて食べます。その命令を神が、エジプトから出るイスラエルの民に対して語られて以降、民は毎年、その時期に過越の祭りを守るように神から命じられていました。13章以降の場面は、その食事とその後のイエス様の弟子たちの会話になっています。イエス様が捕らえられる前までの数時間が、13章から17章までに書かれています。ヨハネがこれだけの紙面を割いているということは、イエス様がどれだけその短い時間に、ありったけの愛を示して弟子たちに語られたか想像できるでしょう。

「この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時」とあります。これは十字架によって弟子たちから去って行くことだけでなく、むしろ、父のみもとに行くとありますから、よみがえられそれから天に昇られることを意味しています。イエス様は弟子たちに愛を示されますが、その前にイエスご自身が永遠の昔から父の愛を受けておられました。「1:18 父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」主イエスにとって、父のもとに戻るというのはこの上のない喜びであります。

しかし、「世にいるご自分の者たちを愛してきた」者たちを後に残すことについて、ご自身が去ることについても強く意識しておられました。イエス様はこれまで、ご自分を信じた者たちを、「父がわたしに与えてくださった」と言われました。「10:29 わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。」父がご自身にくださったのだから、ご自分のものを愛されました。神はもちろん、世を愛しておられます。しかし、ご自分のものを愛されているということは、また異なる親密な愛です。世間一般の人、隣人を愛することも命じられていますが、神のものとされた者たちを愛するということは、各段に違います。

そして、「最後まで愛された」とありますが、別訳では、「極みまで」愛されたとあります。最後まで責任をもって愛したというよりも、ありったけ愛した、最後だから、という意味合いですね。

## **2A 足洗いを受ける弟子たち 2-11**

その愛を示すために、初めに行われたのが足洗いです。語られる前に、行いで示されたのです。

### **1B 万物が委ねられておられる方 2-5**

2 夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。

ヨハネは、すでにイスカリオテのユダがどのような心を持っていたのかを、明かしていました。マルタの姉妹マリアが、香油をイエス様の足に塗った時に、「なぜ香油を売って、それで貧しい人々に施さなかったのか。」とマリアを咎めましたが、「12:6 彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盗人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んで

いたからであった。」彼は、心に闇を持っていました。周りの人々には、イエスの弟子であり、しかも信頼されている弟子としてみなされながら、誰にも気づかれることなく、この悪を行っていたのです。そして、他の福音書で、祭司長たちから銀貨 30 枚を受け取っていて、イエス様を引き渡す機会を狙っていたのです。

悪魔が彼の心に思いを入れていた、というのが、彼の思惑の背後に働いていたことです。人を殺すことの背後には、悪魔がいます。そして、神の御子ご自身を殺すことについては、なおさらのこと悪魔がいます。蛇の子孫が女の子孫のかかとをかむことが、創世記 3 章 15 節にあります。イエス様は、殺意をもってイエス様を捜していたユダヤ人指導者について、「8:44 悪魔は初めから人殺しで、真理に立っていません。」と言われました。しかし次の言葉があります。

3 イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。

イエス様は、悪魔の計略も全てご存じで、それもすべてご自身の手の中にあり、神のご計画の中にあることを知っておられたのです。「知っておられた」というのがいいですね。もうすべて知った上で、ユダの思いに悪魔が入っていることも知って、共に食事をされていたのです。イエス様は、ご自身が最後まで忠実に父に仕え、死にまで忠実に仕えた後に、それから父がご自身に一切の権威を与えることを知っておられました。有名なピリピ 2 章の言葉には、こうあります。「2:9-11 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」イエス様がよみがえられてから、弟子たちに対して、「マタ 28:18 わたしは天においても地においても、すべての権威が与えられています。」

4 イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。5 それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。

この足洗いがいったい、どういう意味を持っているのか、イエス様がパリサイ人シモンの家に行かれて、シモンに話された時のことを思い出すといいです。「ルカ 7:44 この人を見ましたか。わたしがあなたの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐってくれました。」客を招く時に、このようにして足を洗うのです。当時の履物はサンダルであり、道はアスファルトで舗装されているわけではないですから、埃が立っているところを歩きます。帰ってくると、妻が夫の足を洗う、子供が父の足を洗ったり、また自分自身で洗いますが、客が来た時は、しもべに洗ってもらいます。あるいは自分自身が足を洗います。しもべが行うことであり、イエス様が行われているのは、まさにしもべが行っていることです。

中東の文化では、足の前に来ることは相手を王のように敬愛し、ひれ伏していることであり、サンダルを人に向けたり、またサンダルを与えることは相手を侮辱することです。ずっと前、ブッシュ大統領が会見中、イラク人のジャーナリストから、靴を投げられて、見事にかわしましたね。卵ではなく、靴なのです。ヨシュアがカナン人の王を首のところで足で踏みつけることは、完全に制圧したことを示し、イエス様も足でサタンを踏みつけることは、彼を圧倒的に押しつぶしたことを意味します。ですから、足を洗うということは、自分のプライドとか全て捨てて、相手の下に自分を置き、相手に仕えることを意味します。

弟子たちが、誰が一番偉いか？という議論を、イエス様が十字架に付けられる話しをし始められた時から、何度となくしていたことを思い出してください。彼らは、主がエルサレムに行かれたら、神の国を立て、王キリストとなれることを信じていました。ですから、この方のそばにいた彼らは、誰が荣誉



ある地位につくか議論していたのです。そして実際に、食事の席に座った時にも意識が働いていたことでしょう。当時、座るのはトリクリニウムと呼ばれる、コの字になっている円卓で、お膳と同じぐらいの高さです。そこに座るといっても、肘をついて横になるようにして食べていました。<sup>1</sup>そして、足は外に向けて座っているので、しもべがその足を洗うことはできたのです。

そのような中で、イエス様が率先して、足を洗われました。仕えるというのは、いわば、「必要とされているのに、みなやがやっていないところで、その必要を満たす」と言ってよいでしょうか。みな右を向いているところで、左を向いて必要を満たすようなことでしょうか。ただ人から言われたことを行うということではなく、イエス様のように人々が置き忘れているものを率先して行うということもあるでしょう。そして、みな避けたいと思っていることを、行うということです。

## 2B 足洗いにある清め 6-11

6 こうして、イエスがシモン・ペテロのところに来られると、ペテロはイエスに言った。「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。」<sup>7</sup> イエスは彼に答えられた。「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」

ペテロは、恐縮したというよりも、恐ろしくなったのだと思います。主であるイエス様が、どうしてもべになられるのか？自分が洗わなければいけないのに主が洗われている、こんなことがあってはならないという怖ろしさです。けれども、主であるイエス様は、私たちのために、私たちの犯した

<sup>1</sup> <http://www.redeemerofisrael.org/2012/04/setting-of-last-supper-triclinium.html>

罪を取り除くために、十字架における辱めを受けられることによって、仕えられます。主である方が、私の必要のために仕えられるのです。この限りないへりくだりの中に、私たちはどうしようもない恐れ、畏敬を抱くのです。「詩 120:4 しかし、あなたが赦してくださるゆえに、あなたは人に恐れられます。」

イエス様は、今、していることが分からなくても、後で分かるようになると言われていました。そして、後にペテロは、分かるようになりました。牧者を始め、謙遜を身に着けることについて第一の手紙で教えました。「1 ペテ 5:1-5 私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じ長老の一人として、キリストの苦難の証人、やがて現される栄光にあずかる者として勧めます。2 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って自発的に、また卑しい利得を求めてではなく、心を込めて世話をしなさい。3 割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。4 そうすれば、大牧者が現れるときに、あなたがたは、しぼむことのない栄光の冠をいただくこととなります。5 同じように、若い人たちよ、長老たちに従いなさい。みな互いに謙遜を身に着けなさい。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与えられる」のです。」

8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足を洗わないでください。」イエスは答えられた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないこととなります。」9 シモン・ペテロは言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「皆がきよいわけではない」と言われたのである。

興味深いやりとりです。ペテロが足を洗わないでくださいとお願いしたら、「あなたはわたしと関係ないこととなります。」と言われますから、彼は焦って、「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」と言います。すると、興味深いことを話されます。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。」と言われます。これは、どういうことか？

これまで、ヨハネの福音書では水というと、永遠の命を表す時に使われていましたね。サマリアの女の時や、仮庵の祭りの時にイエス様が、心の奥底から生ける水が流れると語られた時、それは御霊のいのちのことでした。けれども、ここではイエス様が後で話されますが、「15:3 あなたがたは、わたしがあなたがたの話したことによって、すでにきよいのです。」清めについてでした。イエス様の言葉によって、魂が清められるということです。

さらに、ここで水浴したものは再びそれをしなくてよく、足以外は洗う必要はないと言われていきます。ここは、祭司のことをイエス様は考えておられます。祭司はその職に任じられた時に、祭服を



身に着ける前に全身を水浴びします。これは一回限りです。けれども、祭壇と聖所の間に、洗盤があって、そこで手足を洗って聖所の中に入ります。これは、日ごとのことです。つまりは、人が神に仕える者になるとき、つまりイエス様を信じ、受け入れ、この方を主とする時に、御霊によって自分自身は全て清められたのです。「テト 3:5 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。」清められた者だから、イエス様と交わることができます。けれども、日々、この地上を歩む中で、思いや心が汚れてしまいます。それをみことばによって清めていただくのです。

この区別が必要ですね。御霊によって洗われたことを知らないと、罪を犯してしまったと心に責めを感じる事にイエス様から切り離されて、もう一度救われなければならなくなります。そんなことはありません。ならば、一度救われたのだから、あと何もしなくても自動的に天国だ、ということでもないのです。救われたのだからこそ、日々の歩みで清めを求めます。

そこで大事な言葉が、「皆がきよいわけではない」という言葉です。イエス様を裏切る、イスカリオテのユダは、救われてもいなかったということなのです。ここに大きな違いがあります、ペテロもこれからイエス様を三度、知らないと言います。しかし、そうやって罪を犯すこと自体がその人が救われる、救われないということを決めるのではないのです。主は、世を救うために来られたのですから、みことばを聞いて守らなかったとしても裁きません。裁くのは、この方を拒む人、この方のことばを受け入れない人です。イスカリオテのユダは、知識として、環境としても、人々から見ても、イエスの弟子として見えたが、この方を受け入れていなかったのです。

### **3A 主の命令 12-20**

#### **1B 互いに仕え合う 12-17**

12 イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。13 あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。14 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。

イエス様は、彼らが、だれが偉いのかと議論していた中で、ご自身はしもべの姿を取られました。そしてそのしもべの姿こそが、イエス様を主としている者たちの姿であることを教えておられます。「互いに足を洗いあわなければならない」とは、文字通り足を洗うことではなく、仕え合うことです。私たちがキリスト者として生きていくと、教会につながる者として生き、また奉仕の務めの中にいると、いつの間にか弟子たちのように、「自分はイエスに近いから」「自分は聖書の言葉を知っているから」「自分はこれだけ仕えているから」ということで、自分が何かまざっているかのように思ってしまう。絶えず、自分自身を吟味しないといけません。

そして、これは、イエス様が彼らを愛された中で行われたことであることを思い出してください。愛するって何をすることなのか？と思いますね。愛するとは、何か暖かい気持ちになることではないですね。具体的に行動に移すことです。「Iヨハ 3:17-18 この世の財を持ちながら、自分の兄弟が困っているのを見ても、その人に対してあわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょうか。子どもたち。私たちは、ことばや口先だけではなく、行いと真実をもって愛しましょう。」

16 まことに、まことに、あなたがたに言います。しもべは主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりません。17 これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。

しもべ、遣わされた者とありますね。私たちの主ご自身が、また遣わされた方が、仕え合いなさいと言われているのですから、それ以上に賢くなることはできず、他のやり方はないわけです。牧者が人を強制したり、支配したり、または長老、指導者に抵抗し、従わなかったり、こうやって教会を良くしないといけないうのだと考えも、主イエス様以上になることはできないのです。主がそのようにされたのだから、仕え合うことによるのみ初めて成り立ちます。

そして、主は、このことを分かって、それで行うなら幸いです、と言われていています。行うところにある喜びをぜひ知ってください。教会に連なる者として、具体的に何かに関わって見てください。行うことによる幸せを得ることができます。

## 2B 裏切りの予告 18-20

18 わたしは、あなたがたすべてについて言っているではありません。わたしは、自分が選んだ者たちを知っています。けれども、聖書に『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かって、かかとを上げます』と書いてあることは成就するのです。

再び、イエス様がイスカリオテのユダについて言及しています。主は、弟子として十二人を選びました。けれども、その一人イスカリオテのユダは、神に選ばれた者ではありませんでした。なぜ彼を十二弟子の中に入れられたのか？私はずっと分かっていませんでした。その最も大きな理由は、もちろん、ここで主が引用されている預言が成就するためであります。そして分かってきたのは、その後、教会に、裏切る者、というか、本当は選ばれていないのにそれでもいる者がいるのだ、という現実があり、そこにイエス様は寄り添っておられるということです。主ご自身でさえ、神の選びによる者でない人を選ばれたのです。ましてや、私たちが教会として集う時に、本当は仲間でない人も入ってくるということです。(Iヨハネ 2:19 参照)

この詩篇は、ダビデが最も信頼していた助言者でアヒトフェルがダビデを裏切ったのが背景で

す。共に同じパンを食べている仲というのは、本当に親しい仲であり、一つにされているという仲です。そういった者が、先ほど話したように最大の侮蔑である、足の裏、かかとを上げられたということです。これが、キリストが自分の最も近い、信頼関係のあるところから、裏切りがくる預言でありました。これから、イスカリオテのユダが食事の席を立ちます。親しい交わり、食事の席に、そこに属していない者はいることはできなくなるでしょう。

19 事が起こる前に、今からあなたがたに言うておきます。起こったときに、わたしが『わたしはある』であることを、あなたがたが信じるためです。

イエス様は、モーセにかつて現れた、「わたしはある」という者がわたしなのだということを示すために、予め語られました。イザヤの預言の中に、数多く、前もって後のことを語ることによって、主は、わたしが神であることを表すということを語られていました。「イザ 42:8-9 わたしは【主】、これがわたしの名。わたしは、わたしの栄光をほかの者に、わたしの栄誉を、刻んだ像どもに与えはしない。初めのことは、見よ、すでに起こった。新しいことを、わたしは告げる。それが起こる前にあなたがたに聞かせる。」

20 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしが遣わす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。そして、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

イエス様は、これからのことを語られています。よみがえられてから、弟子たちを遣わされます。その時に、彼らを受け入れる者はイエス様を受け入れ、そしてイエス様を受け入れるなら、父なる神を受け入れるということです。これだけ、イエス様が彼らと一体になってくださるということです。「ルカ 10:16 あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾け、あなたがたを拒む者は、わたしを拒むのです。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒むのです。」そして、パウロがキリスト者を迫害していた時に、イエス様が現れて、最初に語られた言葉を思い出してください、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。(使徒 9:4)」

イエス様は、私たち一人一人と一体になってくださっています。自分がいくら小さき者だと思っても、イエス様は一つになってくださるのです。私たちは、水のバプテスマ、洗礼によって、自分がイエス様と一体になったことを示します。イエス様と一つになりました。その死において、またよみがえりにおいて。そして、それ以上にイエス様が、私たちと一つになっておられます。そして、聖餐にあずかる時は、キリストの流された血と体において、キリストとだけでなく互いに一つになっているのです。